



第 19 巻の刊行にあたって

法律家には、明晰で開かれた議論をする能力が求められる。それは、社会における課題・問題を把握し、解決するために、異なる考え方や多様な観点を整理して位置づけ、道筋を示す能力である。課題・問題を把握することや、考え方や観点の差異と共通性を明瞭に表現すること自体、容易な作業ではない。考え方や観点は、現在の日本の法律家コミュニティに存在するものに限られない。歴史を遡り、海外に目を向け、社会の現場および法学以外の専門分野から学ぶことにより、議論は豊かになる。優れた議論は、新たな考え方や新たな観点を切り拓き、なお取組みを要する課題・問題も明らかにする。こうして議論の射程は広がる。

法科大学院の授業では、このような議論が行われる。もっとも、時間と場の制約から、取り上げる観点や議論の射程は限定される。試験でも、このような議論が求められることは同様である。ただし、時間と場の制約はさらに厳しくなり、観点や議論の射程をさらに限定して暫定的な解答を示すことが必要となる。「東京大学法科大学院ローレビュー」は、教室や答案のような制約なく存分に、こうした議論を展開するための場である。「ローレビュー」の論文は、法律家が営んできた、そして営んでいる議論の蓄積と流れの総体の中に位置づけられる。実際、「ローレビュー」の論文が学術論文に引用されることもある。「ローレビュー」が法律家の議論全体に貢献し続けていることは、東京大学法科大学院の営為の誇るべき成果である。

第 19 巻となる本ローレビューには、学生諸氏から 11 編の論文が投稿され、うち 3 編が掲載された。第 18 巻に比しての投稿数の復調は、喜ばしいことである。厳しい審査を経て本誌に論文が掲載された学生諸氏に対し、卓抜さを讃えたい。教員からは、3 編の投稿をいただいた。ここに、論文を投稿されたすべての教員および学生諸氏に対し、感謝申し上げる。

今回の掲載論文には、情報・情報技術・コミュニケーションをテーマにしたものが多い。第 18 巻の巻頭言で述べたように、情報技術の急速な展開は、社会におけるコミュニケーションの態様と知識の創出・活用の過程を変容させ、新たな課題・問題を発生させると同時に、これまでの法学の観点や考え方の再考を迫っている。今回の掲載論文のテーマ設定は、こうした状況を反映しているのであろう。

末筆となったが、編集委員の学生諸氏には、投稿論文の全体構想から一言一句に至るまで、緻密な調査に基づき審査検討をしていただいた。その際には、専門分野の教員から貴重なご意見をお寄せいただいている。今回の編集においては、初めて法科大学院修士が参加した。司法修習生も含まれていたため、オンライン会議を活用して掲載論文の選考と編集作業を進めたと伺っている。新たな工夫を重ねながら編集を進められた委員の諸氏に、深くお礼を申し上げる。

2024 年 12 月

東京大学大学院法学政治学研究科長
山本隆司

東京大学法科大学院ローレビュー第19巻には、投稿締切日である2024年3月14日までに、11編の学生論稿の投稿がありました。これらの論稿の中から、第19期編集委員会は、掲載論稿として3編を選出いたしました。

たくさんのご投稿をいただき、誠にありがとうございました。

第19期編集委員会